

平成 1 8 年 5 月 1 5 日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館（青梅市駒木町 1-684 Tel0428-23-6859）

瘡 守 稻 荷 神 社

江戸の人々に火事や地震よりも恐れられていたのは流行病、つまり疫病（伝染病）でした。疱瘡（天然痘）・麻疹（はしか）・水痘瘡（水痘）は人生の「お役三病」とされ、一生に一度しか罹（かか）らないこの三つの病を終えることが健康面で最大の願いでした。疱瘡と麻疹は当時の難病中の難病で、患者は高熱を発し、それが長期間に及ぶと意識を失い、うわ言を言います。それは疫病神とか疱瘡神とかが取りついたものと考え、これを祀って送り出しました。

種痘が行われるようになるまで、疱瘡は人々をもっとも長く苦しめた疫病でした。江戸でも絶えず流行し、ほとんどの人が幼少期にかかりましたが、痘痕（あばた）が残ったり、失明したりもしましたので、赤絵と称する疱瘡除けの護符だけが頼りでした。花咲一男著『大江戸ものしり図鑑』にあるように疱瘡は恐れられていた為か疱瘡神といわれる「瘡守稻荷神社」・「笠森稻荷」・「瘡護稻荷」・「カサモリ稻荷」が全国にあります。瘡（かさ）とは日本国語大辞典によると天然痘・できもの・はれもの・かさぶた・梅毒の俗称とあります。

その「瘡守稻荷大明神」が森下町 1125 にもあります。明治時代の初めに書かれた皇国地誌には

「雑社。社地縦四間、横貳間半。面積拾坪。元標ヨリ□□。民有地金剛寺所有地ニアリ。若宇加能賣命、猿田彦大神、天宇受賣命ヲ祭ル。元稻荷大明神ト稱ス。鎮座年月干支未詳ナラズ。里民之ヲ私ニカサモリ稻荷ト稱シタリ。維新ノ際社號ヲ改替ス。社殿 壹間方六尺。」

と記され「カサモリ稻荷」と呼ばれていたことがわかります。また平成 11 年 11 月に青梅山無量寿院金剛寺 59 世権大僧正築山雅一氏が書かれた「正一位瘡守稻荷大明神由緒」には

『稻荷神社の神は、五穀豊穡の神として古くから信仰され、稻荷神社の本社である伏見稻荷神社は平安時代すでに朝廷から正一位の神階を与えられています。やがて、商売繁盛の神としても信仰され、特に江戸の町々には数多く祀られていました。さらにまた、私たちの旧青梅の町に稻荷神社が多いのも商業の町として古く、青梅の町が栄えていたからであろうと思われます。特にこの金剛寺の稻荷神社が「瘡守稻荷」と呼ばれ、病難を救う神として信仰されている点は注目されます。古老の伝えに、腫れ物が出来た時には土の団子を作り、この瘡守稻荷にお供えすると、快癒するといわれています。大変興味深い習俗と思いますが、この習俗は江戸市中の谷中感応寺西黒門町や大円寺境内、小石川御薬園の三ヶ所にあった笠森稻荷が「瘡守稻荷」と呼ばれ、土の団子を供え、腫れ物の治癒を祈り、治れば米の団子を供え

たという祈り方によく似ています。おそらく青梅が江戸との交流が盛んだったことから伝えられた宗教的な習俗なのではないでしょうか。極めて興味深い信仰の形式を伝えていた稲荷神社であったのです。』

とあります。現在では、土の団子をお供えすることもないようですが、毎年2月11日に瘡守稲荷奉賛会が中心になって稲荷講が行われます。当日は朝8時半頃から準備が始まります。

神社の入り口には「正一位瘡守稲荷大明神 大正十年二月初午 信徒中」の幟が両側に立てられ（写真-1）階段の下には一の鳥居があり、社の前には三本の鳥居（写真-2）が建ち、両側には「瘡守稲荷大明神」の赤い幟が10本ずつたてられ、社の周りには錦の幕が掛けられます。社の中にはお供え餅があげられ、そのほかに町内の人達による奉納品（お酒・油揚げ・めざし・赤飯・お塩・お米）が供えられます。10時に金剛寺の築山僧正が社内でお経を上げ、参列した人達全員がお焼香をします。その後、外で達磨やお札・正月飾りなどのお炊き上げ（写真-3）の儀式が行われます。

それが済むと皆でお神酒を頂きます。それから甘酒・うどん・めざし・油揚げ・豆腐などがだされ皆で直会（写真-4）を行ないます。寄付して頂いた人達には金剛寺から頂いてきたお札が配られます。（文責 儘田小夜子）



写真-1



写真-2



写真-3



写真-4